

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 21 日現在

機関番号：31103

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26870521

研究課題名(和文) 高等英語教育における学習者の動機づけ、投資、抵抗

研究課題名(英文) Language learning motivation, investment, and disengagement in higher education

研究代表者

齋藤 明宏 (Saito, Akihiro)

八戸工業大学・基礎教育研究センター・講師

研究者番号：90632084

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：言語習得過程は、学習者の身体、パフォーマンス、アイデンティティ、そして感情の交絡する主観世界としての空間である。研究代表者の本務校において工学を専門とする学生の、学習に対する苦手意識や無関心を説明しうる要因、同時に、選択科目としての外国語を進んで履修する者の経験を記述した。本研究は外国語学習との関連において観察される学習離脱の存する範囲を検討するための質問紙の開発と、英語学習を希望する学生に対する教育介入施策起案の過程で下される諸判断の根拠となる、学習者の外国語学習動機、学習方略、学習履歴などの特徴の検証的検討からなる。

研究成果の概要(英文)：Language learning constitutes a dynamic, subjective space in which the learner's body, performance, identity, and emotions are intricately intertwined with one another. This study sought to describe the factors that potentially explain the aversion and indifference to English as a foreign language learning as observed at the researcher's institution. Meanwhile, it also described the experiences among those who willingly strives to master the language amid the aversion and indifference among the majority of the students at the institution. The research program comprised a questionnaire-development project which sought to investigate the breadth and depth of learner disengagement which was observed in relation to foreign language learning, and another qualitative interview study which explored learner characteristics, such as language learning motives, learning strategies, and learner histories.

研究分野：外国語教育

キーワード：外国語学習 学習動機 学習方略 学習離脱

1. 研究開始当初の背景

(1)第二言語獲得という術語それ自体が示唆するとおり、学習者がその中間言語として想定される構造体を発達させつつ、外国語運用力を獲得する過程としてとらえるメタファーがこれまで優勢な分析視角であった。この獲得メタファーにおいては、学習者はインプットを処理しつつ中間言語構造を目標言語のそれに近似させる過程を経ながら、周囲とコミュニケーション上の意味を交渉し、自己実現を遂げることが想定されている (Block, 2003)。他方で昨今、共同体への参加メタファーが脚光を浴びている。ここでは、目標言語共同体の言語使用上の慣行や実践と調和の内に学習者が社会化され、共同体受容を通してメンバーシップを獲得する過程として第二言語習得過程は認識される (Kalaja, Menezes & Barcelos, 2008)。つまり、言語習得は、学習者の身体、パフォーマンス、アイデンティティ、そして感情の交絡する主観世界としての空間へと変容を被る。個人史的趨勢において、学習とは各々の置かれる状況に依拠し、移ろいやすく間断なく変容を続ける出来事としての意味合いを帯びる。この言語習得観のもとでは、外国語学習とは山あり谷ありの、目標言語共同体への正統的周辺参加と社会化の過程としてとらえなおされる。

(2)研究代表者の本務校において工学を専門とする学生は、平素の講義において学習対象に対する苦手意識や無関心を示すことがある。彼らの意識を説明しうる要因とは何か。同時に、彼らの中には必修ではない選択科目としての外国語を進んで履修する者もいる。こうした学習者はどのような様態で、選択科目である英語の履修を経験するのか。彼らの行動を説明する動機や、学習を継続するために用いられる方略は何か。また、習得行動の先に如何なる所属共同体を構想するのか。本務校における全体的な傾向を把握しつつ、ともするとそのような趨勢の中に埋もれがちな、個人的な学習経験の現実を記述し、以て学習者の必要性や期待に応える教育実践を支える知見とすることが研究開始当初の動機であった。

2. 研究の目的

本務校工学部学生特有の心理、行動および学習履歴上の特性を理論的、実証的に記述し、支援ニーズを特定しつつ、彼らの心理・行動に呼応した介入につなげることを包括的な目的とした。研究の具体的な目的は、大きく次の二点についての理解を得ることであった。教育実践を通じて観察される 学習離脱の範囲とその説明要因、外国語学習への動機・投資行動に作用する社会的要因、各々の学習者の環境、学習履歴、外国語学習観などである。

3. 研究の方法

(1)大別して次の二つの方法を順番に

併用した。一つは、本務校学生の一般的な心的・行動傾向を検討するための定量データおよびそのデータに統計分析を施す方法である。もう一つは、個別学生の学習経験を記述するための定性データおよびそれに主題分析を施す方法である。

(2)定量データ分析においては、日本の高等教育において学習離脱についての観察やそれについての考察をまとめた文献を調査した。傾向を調査するためには、一般的には質問紙が用いられる。文献調査においては、一定数の定量的データを収集し、かつ統計分析を施した研究が一件入手できた。しかし、その研究においては、質問紙の作成がデータ分析の計画を考慮していないなどの問題が認められた。そこで、高等教育における学習離脱に関するデータはないが観察に基づく考察をまとめた別の一件の先行研究、および研究代表者自身の観察に基づき、学習離脱傾向を調査するための 5 件法による 34 項目からなる質問項目を作成した。パイロット調査を経て質問項目を改善し、145 名の学生からオンラインで回答を得た。スクリーニングを行ったのち、データの記述統計量を算出した。また、観察変数に影響する潜在変数を探るため、探索的因子分析を行った。因子の抽出は最尤法、回転方法にはプロマックス法を用いた。因子数の決定には固有値 1 以上を基準とし、スクリープロット等の検証を合わせて行った。手順の詳細は後掲の雑誌論文を参照されたい。

(3)定性データ分析においては、次のような特徴を持つ工学部 2 年生を調査対象とした。

中等教育段階までに十分な英語学習の機会を持たなかった学習者、中等教育段階において英語学習に苦手意識を持っている学習者、大学において英語学習を始めたか、継続をしようという気持ちのある学習者である。2 年次開講の選択の英語科目を履修する 13 名の学生と、ナラティブ・ディスカッション・グループ (Midgley, 2013) に類似する、半構造化インタビューを行った。それぞれのグループ参加者は学生と研究代表者の計 2 名または 3 名である。学生は単独で、または履修者のうち好きなメンバーとでペアで参加した。質問項目をまとめたスケジュールに沿って、自由に討議した。得られたデータは研究代表者も含めた参加者全員で行われた対話である。質問項目は、主に参加学生の学習歴に着目しつつ、初等教育段階から大学で選択した英語科目を履修するという行動をはじめ、英語学習への取り組みの姿勢と学習方略、そして、その時期の英語学習に対する心的態度を探るものである。データは主題分析により、主に内容に注目した。観察されたテキスト形式データを英語学習行動の経験の特徴づける心理・行動要因として理解するため、外国語学習行動・心理の理論枠組み内での分類(カテゴリー)を参照・援用した：動機づけ(余暇活動・消費行動としての外国語学

習[Kubota, 2011]を含む)、学習方略(Oxford, 1990)。次の手順で分析を試みた。手順としては次の二点を行った。データの重要な一節ごとにコード(名前)を付していく作業(研究目的に関わるものに特段の注意を向ける)であるコード化(coding)、およびコード間の関係性を探り、それらコードをカテゴリーに仕分ける作業である。

4. 研究成果

(1) 定量データ

探索的因子分析により、分析に適さない質問項目の除外などを経て、学習離脱を説明する5つの因子を推定した。第1因子には学習への関与に関する4項目が十分な因子負荷量を示した。学習者の関与の度合いの弱さが、学習離脱につながると考えられ、この因子を関与の欠如と名付けた。同様に、第2因子を注意散漫(5項目)、第3因子を学習に対する備えの欠如(3項目)、第4因子を反集团的傾向(2項目)、そして第5因子を関心・集中力の欠落(2項目)と名付けた。各因子のアルファ係数も十分高く、信頼性についても確認された(.74~.80)。詳細は後掲の雑誌論文を参照されたい。

記述統計量を検討したところ、観測変数の得点は平均して1.48~2.71であった。5件法の間中得点が3であることを考慮すると、今回の調査対象に限れば、研究代表者の想定とは対照的に学習離脱の度合いや範囲は限定的なものであったと評価することができた。

(2) 定性データ

調査対象者の学習歴、英語を選択するに至った動機、また、学習への取り組み方と学習方略に認められる個人の動機について、次のような特徴が認められた。

学習方略

参加学生が中等教育において用いたことのある学習方略はごく限られたレパートリーであった。記憶・認知に頼る機械的学習に特徴づけられる。中等教育段階までに学習方法を確立していなかったり、多様な学習方略に触れる経験を欠いたりする様子が認められる。大学では複数の学習方略を紹介し、個人差に合わせながら学習方略を選択的に実践・体得する機会を授業内で確保することが重要である。他方で、中等教育で経験した学習アプローチを逸脱して、自由に勉強方法を考案、実践している様子も認められる。講義や課外活動において様々な学習方法を体験的に紹介することが必要であることが示唆される。

(以下データ抜粋)

・中学も高校も一緒ですね。テキストみたいなものがあって、ここテスト範囲だつーとこを、とりあえず覚えて勉強。何の実にもなってないと思う。とりあえず、点数が、その場しのぎの点数を取る勉強です(中・高で)。
・普段からそういうやり方しかやってなかったから、どういうふうに勉強していいか、多

分わかんなかったんじゃないですか。それで、すごい損でしたね。(中・高で)

・速読つか、もう本読んで、覚えるはしないっす。覚えるはしないんで、本読んで、意味わかんなくても飛ばすとかして、大体こういう意味かなって感じで飛ばして自分の中でストーリー作っちゃうじゃないですけど。飛ばして読んでも勝手に覚えます。あれこれ見たことあるって。(大学で)

学習動機

選択科目の英語をあえて履修するという点では、一定強度の動機づけが認められる。しかしそれは「洋楽の歌詞を理解したい」など、余暇や消費活動としての英語学習(Kubota, 2011)として説明される行動性向に支えられるものである。したがって、教室内で動機づけを学習行動に結び付ける介入が可能であっても、教室外でも自律的な学習行動が持続する施策が重要になる。従来理論の想定する言語習得・獲得をめざす指導法や学校環境を鑑みると、こうした学習者の外国語を介した文化的参画についての思い入れに寄り添うことを許さない制約も存する。従前の理論の想定を拡張した、ポップカルチャーを題材とした発音指導、リーディングなど多様な目標言語共同体との関係性を許容するアプローチやコンテンツが有効かもしれない。他方で、学習行動を教室外でも持続させることを視野に入れた介入として、日常的に英語を使う環境整備や、自己の動機づけを意識化・多様化させる機会などが必要である。

(以下データ抜粋)

・音楽(洋楽)を聞く上で、これは覚えてたほうがいいなみたいな、そういうのは何かちょっと眠くななんないけど、本当に文法の日本語でやる英語が全然なんかもう、すっげえつまんねえなみたいな(笑)。基礎があんまないから、高校とか中学の。だから主語、動詞とかわかるけど、どれが副詞、補語とか・

・大学は、洋楽がちょっと好きになって、それで英語もちょっと興味出てきた。
・・・日本語でこういう言葉、英語で何ていうんだらうとか、興味出てきて、それで英語のゼミ取らせていただいて。

目的志向

語学試験受験は、学生が自ら動機づけストラテジーとして実践しているようである。しかし彼らは必ずしも検定試験のスコアを伸ばすことそのものを目的にしているわけではない。実用に耐える英語運用力を育てる指導・習慣づけが、学生の動機と合致する介入といえそうである。目標実現のための実用を志向する(英語目的)機会の確保が有用である。

(以下データ抜粋)

・英語は勉強するもんじゃないんすよ。習慣なんすよ。だから、身近に英語がありふれることが大切であって、勉強するもんじゃないすねって俺の考え(笑)。
・英語興味出てきたから頑張ろうと思うんで

すけど、目標がないと頑張れないなと思いました。何かを受けるとかじゃないと。ただ(単純に)英語を勉強してもしょうがないなと思って。で、TOEICを受けてみよう。

・最近思うようになったのは、高校のときはやっぱり英検、英検ってするので、筆記とか、多少は面接で話したりすることもあるんですけど、TOEIC でいい点を取るっていうのも大事なんですけど、実際に話せるようになるっていうほうが、実用的なのかなっていうのは最近思うようになってます。

(3)本研究では、計画段階で想定した学校文化、学習することに対する抵抗を、研究実施段階では学習離脱としてとらえなおす必要があった。これは上述の定量的データが示した通り、本務校においては社会学的視角を通して可視化できる様式である抵抗の概念でとらえられる行動がほとんど認められなかったことによる。また、定性データについては、データを広範に見ていくのではなく、焦点を絞ったうえで分析をすることでさらなる知見を得ることが可能と思われる事例がいくつか認められた。たとえば、インタビューデータから、同一人物の学習ナラティブを研究者が時系列で再構成し、そのナラティブについて参加者本人のコメントとフィードバック、修正点を求める作業、修正したナラティブについてさらにコード化を施す作業、複数の参加学生のナラティブを比較、対照する、ポジショニング理論を使い、インタビュー内での参加者の目標言語共同体のメンバーシップ構成過程を記述するなどの手続きをとることも想定可能である (cf. Riessman, 2008)。

5 . 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

Akihiro Saito & Michael E . Smith, Measurement and analysis of student disengagement in higher education: A preliminary exploration, *IAFOR Journal of Education*, Refereed (査読有), Vol. 5, Issue 2 (in press), to appear September, 2017, ISSN: 2187-0594.

[学会発表](計2件)

斎藤 明宏、工学部学生の英語学習動機と方略、第13回日本質的心理学会全国大会、2016.9.24、名古屋市立大学(愛知県)

Akihiro Saito & Michael E . Smith, Development and validation of the Higher Education Resistant Attitude/Behavior Scale, 2nd Asian Symposium on Education, Equity and Social Justice, December 21, 2015, KKR Hotel Hiroshima (Hiroshima Prefecture)

6 . 研究組織

(1)研究代表者

斎藤 明宏 (SAITO, Akihiro)

八戸工業大学・基礎教育研究センター・講師

研究者番号：90632084